

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 84 号

2020 年 6 月

第8代日本薬史学会会長就任のご挨拶

森本和滋

新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言発令の中、異例の議決権行使を会員各位にお願いし、4月24日の総会(Web会議)を経て、第8代会長に就任した森本和滋でございます。

当方に任された使命は、長く続いている会員減少傾向を止め、魅力ある学会にすること。中堅会員が活躍できる場の醸成、女性会員の各種委員や幹部への登用、PubMed 再掲載を目指して薬史学雑誌レベルアップ。ISHP との連携強化、70周年を迎える記念事業計画。最後に10年振りの会員名簿の作成も至急の必要と考えております。

日本薬史学会との出逢いは、50歳で同期の仲間とホノルルマラソン完走したことをきっかけに翌年1997年PMDECに転身、その後のPMDAが軌道に乗るまでの15年間の歩みをどこかに纏めたいとの思いがきっかけでした。2010年夏「上記の内容の投稿可能か」事務局に電話すると大角さんから五位野理事を紹介頂き早速電話「可能です」との返事、クリスマスには一次原稿を作成し、共著者の藤原康弘先生(現PMDA理事長)と川原章理事に見て頂きました。同じ頃、母が緊急入院し奈良の病院まで毎週通いました。翌年1月14日逝去(89歳)、長年の願いを叶えて京大白菊会に献体、その直後に投稿。2月8日末廣編集委員長から「20世紀末、医薬品の安全性にかかわる多くの難問が積出、この背景からPMDECが設立され、その後の社会変動から機関の変遷が記述されていて、本誌の原報として採

森本和滋会長のプロフィール



1946年滋賀県生まれ、奈良県育ち。薬学博士、認定薬剤師。岐阜薬科大学卒業、大阪大学大学院薬学研究科修了。1973年4月厚生省入省(上級甲薬)。1984年米国ペンシルバニア州立大学医学部癌研ポストドク、1987年国立衛生試験所医化学部室長、1997年PMDEC(現在のPMDA)設立に参画、審査管理官。1999年WHO本

部 EDM (必須医薬品政策部)SPMI プロジェクト課長(4年間)。2003年公務員退職後、7年間の聖書、ギリシャ語、カウンセリング等の学びを経て、2011年5月13日D.Min(実践神学博士 米国・LRU)取得。聖書教師、「がん哲学外来」お茶の水メディカルカフェ ファシリテーター、国立医薬品食品衛生研究所・生物薬品部客員研究員。

択可」との通知が届き『文中にある厚労省の入口脇の「誓いの碑」の写真添付が望ましい』とのコメントも頂き、その図の写真は、近藤理事長のご配慮でPMDA6階待合室の壁に掲示され、薬学史事典(2016年3月刊行)の執筆、第1回読書会の開催(2017年5月24日)へと繋がり、現在第20回を迎えています。

本学会に親しむきっかけは、津谷喜一郎第6代会長からWHO後輩のよしみで国際委員、そして企画委員にも入れて頂きました。また、山田光男名誉会員と奥田潤名誉会員から、それぞれ或るきっかけから、お手紙やお電話を頂くようになり本学会の歴史や薬史学雑誌への熱き思いを教えて頂きました。

2019年12月29日逝去された山川浩司第5代会長の「私の薬史研究との関わり」(60周年記念号; Vol.49, No.1, 2014)は、薬史研究のヒントを頂ける貴重な教材だと思っております。

世代を超えて心優しき方々に触れられる本学会の

特徴を活かして、更に発展させて行ける一助となれたらと願っております。会員諸氏のますますのご支援、ご協力をお願いして会長就任のご挨拶とさせていただきます。

役員新任・退任挨拶

今回、総会での新任・退任挨拶ができなかったため、誌上でご挨拶をいただきました。

総務委員長に就任して

小清水敏昌

新型コロナウイルス感染拡大防止策の影響で、特殊な形式のWEBでの総会が開かれ、今回総務委員長に選任されました。よろしくごお願い申し上げます。今までは編集委員会に所属していました。本学会の会員数が年毎に減少傾向である。現在会員総数が264名で、2009年のそれと比較した場合に約80名近く減少しています。会員増のため抜本的な策を早急に検討する必要があると考えております。会員の皆様のご協力をよろしくごお願い致します。

編集委員長・常任理事就任ご挨拶

齋藤充生

これまで、編集委員として微力ながら協力いたしてまいりました。この度、拝命いたしました編集委員長としての初仕事は、新旧役員の挨拶をいち早くお届けするための薬史レターの前倒し発行となりました。今後も会員相互の情報交換の場として充実に努めます。薬史学雑誌は、査読誌として多くの学位論文の根拠ともされてきた伝統を生かしつつ、まずはJ-STAGEへの継続的な掲載を目指します。英文での発信力の強化のための構成等の見直しも検討しています。よろしくごお願いいたします。

総務委員新任ご挨拶

武立啓子

今年度より総務委員を務めさせていただくことになりました。製薬企業研究所、大学病院薬剤部、薬科大学を経て、薬剤師の生涯学習に携わり、本学会には4年程前に入会いたしました。薬史学は、薬学・薬剤師の歴史を研究対象として、その成果をもとに将来に貢献する貴重な分野と考えます。至らぬ点もあると思いますが、これまでの経験も活かしながら委員として努めたいと思います。ご指導のほどよろしくお願いいたします。

編集委員新任ご挨拶

赤木佳寿子

私にとって歴史は知の基礎をなすもの。「歴史の機能は、過去と現在との相互関係を通して両者をさらに深く理解させようとする点にある」とE.H.カーは述べています。過去を知り現在を理解し未来に繋げるための大切な手段の一つ。すなわち、学術的な薬史研究は未来につながっています。薬史学雑誌は伝統ある学術雑誌。編集委員を仰せつかり、私にとっては身にあまる重責ではありますが、精一杯努めて参りたいと思います。よろしくごお願いいたします。

編集委員就任ご挨拶

小林 哲

薬史学会に初めて参加したのは一昨年、新潟市のときで、まだ若輩者ではありますが、年齢はそれなりにとって、間もなく定年を迎えようとしています。出身は東京都の日野市、都立国立高校が甲子園出場したときの卒業で、大学は京都です。専門はバイオ医薬品の安全性で、特に今はバイオ後続品を中心に調べています。今後は本学会を通じて医薬品全般の歴史を勉強したいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

企画委員新任ご挨拶

宮崎生子

本年4月より、企画委員に就任いたしました、宮崎生子でございます。(独)医薬品医療機器総合機構にて研究振興、健康被害救済の迅速化、治験の信頼性向上、局方の近代化などの業務に携わっておりましたが、平成30年4月より、昭和薬科大学社会薬学研究室教授として着任し、「患者さん本位の視点で判断できる薬剤師の育成」を目標に日々励んでおります。本学会において、若い方々がこれまでの歴史も踏まえ、更に活躍して行けるべく、微力ながら、尽力させて頂きたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

企画委員新任ご挨拶

宮本法子

この度、企画委員を務めさせていただくことになりました。40年以上前、「薬学とは何か」という問いに真正面から答えられる教員になりたいと考え、日本薬史学会に入会しました。今は亡き日本薬史学会名誉会員高橋文先生からは、「医薬分業制度等の歴史には、血の滲むような思いで行動してきた先人達がいたことを忘れないで欲しい」と熱くご指導いただきました。この教えを私の原点として、学生や若い世代の方々に伝えていきたいと思っております。よろしくお願い致します。

広報委員新任ご挨拶

木村友香

この度、広報委員に就任いたしました早稲田大学教育学部助手の木村友香と申します。

私は戦前に存在した女子薬学専門学校の発展を中心に、女性の理系分野への進出の歴史を研究しております。まだまだ勉強不足ですが教育の歴史の立場から薬史学会の皆様のお役に立てればと存じます。一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

広報委員新任に際して

近藤晃司

このたび、日本薬史学会広報委員会委員に新任されました近藤晃司(薬事日報社)です。「医薬分業の歴史 証言で綴る日本の医薬分業史」の担当編集者をしていただご縁で、西川隆先生、中村健先生の勧めで入会いたしました。広報委員新任に際しては、薬史学会における新規会員の開拓のためのPRや広告収入の拡充を図ると共に、若い会員を後押しするためにも学会ホームページの活用方法を諸先生方のご意見を傾聴しつつ、より魅力的にしていければと思っております。どうかよろしくようお願い申し上げます。

評議員就任ご挨拶

西谷篤彦

この度、本会の評議員を仰せつかった西谷篤彦です。これまでは一会員として、貴会に関わって参りました。今まで経験した事のない世界的危機・国難を迎えている現在、これからは健康で安心な社会への貢献はもとより医療・薬学に携わっている方々やこれからの新しい時代を背負って活躍する若い人たちに医療・薬学の歴史を通して広い知見と検証力を養うような情報を発信し、会員相互の交流のお手伝いが出来たらと思います。よろしくようお願い申し上げます。

総務委員長退任のご挨拶

鈴木達彦

2016年より4年間にわたりまして、日本薬史学会の総務委員長として活動できましたことは大変貴重な経験になりました。先生方にはたくさんのご指導ご鞭撻を賜り、心より御礼申し上げます。退任はいたしますが、一会員として活動を続けていきますので、今後も変わらぬご厚情を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ではございますが、日本薬史学会と皆さまのご健勝を祈念いたします。

薬史学会・役職退任ご挨拶

松本和男

筆者が田辺製薬(株)の研究・開発を担当していた頃、本会・元会長の山川浩司先生(当時、東京理科大学教授)が、同社顧問の東大名誉教授・菅澤重彦先生を訪ねられた折、「薬の道修町の歴史」が話題になり、筆者に入会をお奨めいただいた。

数年後の1999年に入会させていただき、爾来、理事、常任理事、企画委員長、柴田フォーラム委員長を拝命した。この間、「創立六十周年記念号」発行と「柴田フォーラム」創設に携われたことが思い出深い。昨年(2019)秋、80歳を迎えた際、退任させていただく事になった。終始、多くの先達、会員の先生方にご協力、ご支援をいただいたことに深謝申し上げます。ありがとうございました。

編集委員退任ご挨拶

久保鈴子

2年間、編集委員を務めて参りました。この間、前小清水委員長の下、荒木・齋藤両委員と共に投稿規定の改定に携わったことは記憶に残る作業でした。また、雑誌編集を通じて薬学史への興味が深まると同時に会員の皆様の薬学史への熱い想いも感じました。変化の激しい現代にあっても、国内・外の先達が築いてきた歴史を大切に、明日の薬学への橋渡しの一翼を薬学史雑誌が担い続けることを期待しております。

訃報

本学会理事で、2018年会(新潟)で年会長を務められた寺田弘先生(新潟薬科大学学長)が6月1日に逝去されました(享年83歳)。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

海外の薬史学会の今(5)米国

国際委員会 宮崎啓一

AIHP (the American Institute of the History of Pharmacy) は2019年に薬史学に貢献した者に対し、いくつかの賞を授与した。AIHP George Urdangメダルが、Gregory Higby 博士の19世紀のアメリカの薬学の発展に寄与した著述に対して授与された。主な業績として、Higby 博士の著書の洗練された筆致には学識経験の幅広さと奥深さを思わせる引用がなされ、アメリカ薬史学さらには薬学の発展に関する洞察を踏まえた可能性が詳述されている。

博士は2018年12月の退任まで AIHP の役員をつとめた。

Edward Kremers賞が Alain Touwaide 博士に授与された。Touwaide 博士の受賞は、古代、ビザンチウム、アラビアおよびルネッサンスにおける医薬および製薬原料の研究に関する著書によるものであった。特に Tractatus de Herbis (Codex Sloane MS, 1440年に描かれた薬用植物の図解論文)を監修していることにある (Moleiro, 2013)。

Robert P. Fischelis賞がGeorge B. Griffenhagen氏に授与された。氏はAIHP会員として数十年間におよぶ支援にあたり、薬史学にも貢献した。惜しむらくは氏は、95歳にて同賞を受賞の後、ほどなく息をひきとった。

Pharmacy in HistoryはAIHPの定期刊行物として、2019年の出版で60年目をむかえた。この

年、AIHPの責任者であり、編集長であるLucas Richert博士は従来の出版について、改革のうえ、新しい編集委員会を設立した。さらに新しい編集チームは、Contributing EditorsおよびReview Editors各々3名の体制で構成された(すべてボランティア)。

中部支部だより

中部支部報告

中部支部長 河村典久

2019年度日本薬史学会中部支部・講演会

日時：2020年2月8日(土) 14:00～16:30

場所：金城学院大学・栄サテライト
〒460-0003 名古屋市中区錦三丁目15番15号
CTV錦ビル4階

参加者：17名

●講演会

演題① 日本の薬学を哲学する

名城大・薬 奥田 潤(写真)

【概要】 日本の現在の薬学を哲学することは、薬学の学問の成り立ち、薬のつくり方、患者への服薬指導まで考えることになる。一方、学問のしくみから薬学を見ると、自然科学、人文科学、社会科学が必要で、薬剤師、患者にとって文化芸術も要求される。

学問としての薬学は基礎薬学、臨床薬学、社会薬学に3大別されると寺岡、津谷は2010年の年会で発表した(薬史学雑誌、45(2)、p160)。一方、筆者奥田は、2012年、薬学にとって人文社会薬学が確立されねばならないと報告した(日仏薬学会40周年記念誌、p175～180)。筆者はこれらを参考にして、学問のしくみから見た薬学と薬剤師と患者の関係を図にまとめた。その中で、人間としての患者に対し、「思いやりの心」を薬剤師がもつことが必要であると考え、書き入れた。「思いやりの心」は優しい言葉として、薬剤師法など法律などにも使用されることを望みたい。

演題② 丹波修治の新たな資料の紹介

圭介文書研究会 河村典久

【概要】 丹波修治に関する資料は、国会図書館をはじめ各地にみられるが、今回、東京の丹波家に保存されている江馬活堂や伊藤圭介、田中芳男らとの交流書簡や、戸籍謄本などが保存されており、その資料と、四日市市立博物館に保存されている900点を超える資料について、その概要を紹介。



関西支部だより

関西支部事務局長 宮崎啓一

1) 第12回 日本薬史学会関西支部研修会 [開催予告]

日 時：未定

講 師：塩野秀作氏（塩野香料株式会社 代表取締役社長）

演 題：大阪道修町における香料取扱いの歴史（仮題）

会 場：大阪富国生命ビル(大阪市北区小松原町2番4号、阪急梅田駅南側隣接)
4階「まちラボ」ルーム A

新型コロナウイルス禍の動向を考慮したうえで、日程を調整します。

〔Book紹介〕

津谷喜一郎 長澤道行 著

「医療にみる伝統と近代 生きている伝統医学」

A5版 276頁 3,300円 (明石書店 2018年6月出版)

本書の著者の津谷氏は日本薬史学会元会長。東京医科歯科大学医学部卒業、WHO西太平洋地域事務局初代伝統医学担当医官、東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学特任教授等を経験した。

著者のこの書の狙いは、医療における伝統 vs 近代を直接見聞したものをありのままの姿で描くことである。しかしこれに加えて、著者の力量により、厚労省の資料や多数の専門書を読破した上で、このテーマを深く分析しわかりやすい展開をしている。

まず第1章は用語紹介から始まる。東洋医学、漢方医学、中医学、伝統医学、民間療法、代替医療、補完ないし相補医療、統合医療などという用語の混沌状況を踏まえて、それらを整理し解説。第2章では、WHO医官を務めていた行動力と分析力に基づいて、日本、中国、朝鮮を含む東アジア諸国の医療を伝統 vs 近代という見地から比較しながら見ていく。第3章では米国における伝統医学の実態をこれまた自分の足・目・耳で眺めていく。

第4～6章では経済的視点、倫理的視点、構造的視点という特定の視点から、医療における伝統 vs 近代を明らかにしていく。現在のわが国で伝統医療

(漢方薬・生薬、健康食品・サプリメントなど)と近代医療にかけられているコストを、国民医療費、生産金額を通して、また医療従事者数では、あん摩マッサージ指圧師・鍼灸師・柔道整復師なども含めて広範囲

に、数字をもとに丁寧に比較分析している。伝統および近代医療の拠って立つ倫理の違い、伝統医療・代替医療が果たしている代替・補完の意義と安全性、有効性、費用対効果についても、冷静に客観的に論が進められている。

この書は、伝統医学の分野でこれまでになかった異色の書であり、伝統・代替医療に従事している方、またそうした医療に興味・関心を持たれている方には、生の情報が伝わってくるばかりでなく、確かなデータ解析に基づく情報が提供されていることで、この分野を的確に把握し、今後の流れをたどるのにきわめて有用であろう。

(三澤美和)



村木 嵐 著
「夏の坂道」

四六版 406頁 1,900円 (潮出版社)

本書は、2019年3月刊行され、9月には早くも二刷が発行された。その帯には、「学問と信仰で戦争に対峙した戦後最初の東大総長南原繁の生涯を描く歴史長編!」、「徒労感に陥りつつ、家族の支えで歩み続ける南原繁を描くドラマが感動的である」と記されている。(写真)

南原繁は、学問と信仰により日中戦争に対峙し、終戦工作を行い、戦後初の東大総長として、戦後教育改革を主導するとともに、国民の精神的指導者として、敗戦によって茫然自失状態にあった国民を励まし、国家再生の勇気を与えた。

12月2日『夏の坂道』発刊シンポジウムが学士会館で開催され参加した。著者・村木嵐氏と宇野重規教授(東大社会科学研究所教授)との1時間の対談では、なぜこの本を書くに至ったかを「南原繁の青春・戦後改革・生き方—未来につなぐ」のテーマで論じられた。

本書は、序章「楠」、第一章「ニアレスト・デュティ」、第二章「真善美を超えるもの」、第三章「洞

窟の哲人」、第四章「運命共同体」、第五章「最後の勝利者」で構成される。

南原繁の生涯が、歴史的背景の中で、新渡戸稲造、内村鑑三、小野塚喜平治、三谷隆正、高木八尺、矢内原忠雄、田中耕太郎、丸山

眞男などと共に生き生きと復活している。「南原先生がいなければ戦後の日本はどうなっていただろう。先生は見事に、日本民族の償いを果たして余りある一生を送られた。まさに、真理を見据えてまっすぐに歩かれた生涯だった」と406ページで結んでいる。

六史学会合同12月例会では、福祉政策について新憲法第25条が議論になった。第五章には、その議論に答えを与える内容が含まれる。本書は、明治40年から昭和49年までの我が国の激動の歴史を理解するのに有用な教材となるものと期待される。

(森本和滋)



Stay Home資料巡り

齋藤充生

新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態宣言で、大学、図書館、博物館・美術館は閉鎖となりました。今年3月30日にPMDAの14階に開設された「薬害の歴史展示室」(パネルや証言映像など)も、4月8日より臨時休館となっています。そのような中、自宅から薬史学資料に接することのできるホームページをいくつか紹介します。

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ
富士川文庫の医学書を含む
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

『東京大学百年史』
東京大学百五十年史編纂準備の一環として 全巻のデジタル化を実施。「通史一〜三」、「部局史一〜四」、「資料一〜三」の計10巻。
<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/contents/news/20200220>

HITNET (産業技術史資料共通データベース)
国立科学博物館産業技術史資料情報センター運用。
産業技術系博物館の収蔵資料を横断的に検索。
<http://sts.kahaku.go.jp/hitnet/>

サイエンスミュージアムネット (S-Net)
日本国内の博物館の自然史標本を横断的に検索。
<http://science-net.kahaku.go.jp/>

ジャパンサーチ
国立国会図書館が運用。日本の文化財や公文書、図書などを横断的に検索。S-Netのデータとも連携。
<https://jpsearch.go.jp/>

国立国会図書館 電子展示会
https://www.ndl.go.jp/jp/d_exhibitions/index.html

国立国会図書館 デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/>

流行性感冒 「スペイン風邪」大流行の記録
内務省衛生局報告書の復刻版。4月末まで Web公開 (書籍販売中)。
<https://www.heibonsha.co.jp/book/b161831.html>

新聞通信調査会デジタルアーカイブ
「通信社ライブラリー」の同盟通信社関係資料、書籍をデジタル化。
<https://www.chosakai.gr.jp/archive/>

新型コロナウイルス感染症コーナー (関西医薬品協会)
発行者・時系列別にエクセルでまとめた「新型コロナウイルス感染症関連通知等リスト」を随時更新し掲載。将来の研究の手掛かりに。
<http://www.kpia.jp/covid19/covid19.html>

薬史往来 「薬史の昔を語る：野上寿先生、第3代会長に」

名誉会員 山田光男

はじめに

1986（昭和61）年、千葉で開催の日本薬史学会「清水藤太郎生誕百周年シンポジウム」の総会で、野上寿先生の第3代会長の就任が決定し、野上会長の学会運営が始まった。

学会運営組織化

当時の学会員数は180名前後の集まりで運営も組織化されず、吉井千代田会長代行が独りで会務を担当される形であった。野上会長は学会運営組織の確立が急務であるとして、総務、会計、会員管理、学会誌担当などの各部門を確立して、従来の幹事をそれぞれの部門の責任者に配置した。

また、当時、本郷3丁目の消防署近くに所在した「学会誌刊行センター社」と契約して、薬史学雑誌の編集、発行、発送業務を委託し、幹事連絡会も同センター会議室を借用して定期的に開催し、会務の一体化を図った。

名誉会員制度

薬史学会員の励みとして、薬史学領域の研究で学位を取得した会員を名誉会員に推薦する制度を決められた。幹事の石坂哲夫、根本曾代子に最初の名誉会員を授与された。次いで、薬史学会創立以来、学会運営実務を担当された吉井千代田会長代行を名誉会員に推薦した。

野上会長は、高橋文幹事の研究「ツェンベリ

の来日とその意義」を高く評価されて、（財）蓬庵社（塩野義製薬）に研究助成を申請して研究助成金を頂き、高橋文も名誉会員に推薦された。

評議員制度

会員増加目標を300名と定めて、具体策として「薬史学会評議員」を全国の薬科大学に呼びかける方針を野上会長が発案され、幹事会で全国の薬学部、薬科大学へ呼びかけ文書を発送した。その成果は京都で開催の薬史学会で現れ、全国の薬学部、薬科大学から20名近い評議員が参加され、成果を得たと言えた。

西部支部の設立

学会の内部体制が整備されたので、対外活動を活発化する目的で、大阪に西部支部の設立を考えられた。設立会合を前に、1996（平成3）年10月10日に野上会長は、健康診断のために慶應病院に入院されたが、ヨードショックで急死された。支部開設の会合には私が参加して、野上会長の挨拶文を代読して西部支部は設立された。

むすび

野上会長の在職期間は短かったが、薬史学会を日本薬学会の部会から独立させ、会員数300名を超える学会にし、米国および欧州の薬史学会とも交流を深め学会発展の基礎を築いたと言えよう（文中敬称略す）。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：齋藤 充生

編集委員：赤木 佳寿子 荒木 二夫 小林 哲

薬史レター 第84号 2020年6月

編集人：齋藤 充生 発行人：森本 和滋

日本薬史学会 The Japanese Society for the History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp http://yakushi.umin.jp
